

審査の結果の要旨

氏名 楊 真

伝統的産地における茶畑の文化的景観が、地域固有の景観資源として注目されるようになってきた。こうした伝統的産地では、てん茶などの高級茶を栽培するため、日本独自の茶栽培法といわれる「覆下茶栽培」が行われており、地域独自の景観システムを形成している。しかし近年、伝統的な覆下栽培は減少しており産地の景観が変貌しつつある。

そこで本研究は、伝統的産地を対象として、茶畑を中心とした文化的景観の変遷を明らかにするとともに、産地における文化的景観の保全のあり方を考察しようとするものである。具体的には、以下4点の研究目的を設定している。①日本茶史の流れの中における覆下茶栽培法の位置付け、②覆下茶産地における各空間要素の変容過程、③保全計画や管理制度の現状及び課題、これら三点を明らかにする。その上で、④これらの知見を踏まえて、茶畑を中心とした文化的景観の保全あり方を考察する。

第一章では、研究背景と目的、研究方法、調査対象地について記述するとともに、文化的景観に関する既往研究をレビューし、本論文の位置づけと論文の構成を述べている。

第二章では、茶栽培の歴史に関する文献の整理、新聞記事の収集および関係者へのヒヤリング調査を通して、奈良・平安時代から現代に至る茶栽培史の流れについて検討・整理するとともに、覆下栽培法の展開についても調査し、その歴史的な位置づけと重要性について考察している。

その結果、覆下栽培法は、茶の伝播に重要な役割を担った仏教寺院とその周辺の山地部で栽培されていた茶畑が、庶民化による消費拡大に伴って平地の農村にも拡大する過程で、品質を確保するために開発された栽培法であると位置づけている。近年では、寒冷紗等の新しい材料の普及とともに、作業が複雑な伝統的覆下茶栽培はしだいに衰退してきたが、茶栽培史の結節点である伝統的覆下栽培法の保全が重要であると考察している。

第三章では、調査対象地として宇治市と星野村を取り上げ、地形図、空中写真、統計等の分析、ヒヤリング調査を通して、市村全域において茶畑および周辺土地利用の変遷を調査・分析するとともに、各地域内の歴史的産地である白川地区（宇治市）、小野地区（星野村）において、伝統的覆下栽培による茶畑の文化的景観の変遷を調査・分析している。

その結果、地域、地区の置かれた社会状況によって変遷動向は異なっており、都市化の進んだ宇治市では、茶畑の大幅な減少、断片化、山地化が進んだが、茶産業が進展した星野村では、茶畑が増加し、減反政策等の影響により集落周辺に移動する動きが見られた点を明らかにしている。しかしながら、伝統的覆下栽培茶畑の文化的景観に関しては共通して減少傾向が著しく、その保全・再生が必要であると考察している。

また、棚がけの材料として覆下栽培を支えてきた森林、竹林及び水田の動向に着目し、従来は、これらの土地利用が茶畑と密接な関係を有し一体的な景観を形成していたが、現在では、域外からの購入や人工的材料の活用により、茶畑と周辺土地利用との関わりが次第に希薄化している動向も明らかにしている。

第四章では、宇治市と星野村における茶畑景観や栽培法の保全に対する取り組みについて、各々の特徴や差異、問題点を明らかにしたうえで、伝統的な覆下茶栽培の文化的景観の保全のあり方について考察している。

その結果、宇治市は文化財保護制度や日本遺産、世界遺産への取り組みを通して、茶畑景観保全に関する多様な活動を展開しているが、覆下栽培法あるいは茶畑周辺の土地利用への関心が十分でないことが明らかになった。一方、星野村では景観に関する取り組みは限られているが、地理的表示保護制度（GI）への登録を通して伝統的本玉露の栽培法を保全し、結果的に茶畑と周辺土地利用の保全にも結びついていることを明らかにしている。

宇治市は景観への意識が強く、星野村は技術やシステムへの意識が強いと言えるが、これら双方、つまり外観としての景観と、それを支える栽培法との関係に対する認識が重要であり、この両者を総合的に保全することが重要であると考察している。

そして第五章では、本論文を総括するとともに、今後の研究課題について述べている。

以上、本論文は、日本における茶栽培の歴史において覆下栽培が重要な位置を占めることを指摘し、伝統的産地において、覆下栽培茶畑の文化的景観の変遷を明らかにするとともに保全への取り組みの現状と課題を整理し、今後の産地における文化的景観保全のあり方について考察したものである。これらの研究成果は、学術上応用上寄与するところが少なくない。よって、審査委員一同は本論文が博士（農学）の学位論文として価値あるものと認めた。